

雨に殺せば



昭和三十八年十二月二十日 印刷
昭和三十八年十二月二十五日 発行

定価 二八〇円

著者 島田 一男
発行者 豊島 清史
印刷者 菅生 定祥

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(元)〇二三八番
振替東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

島田 一 男



KOFUSHA

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

雨に殺せば

セ

指折りしましよ

六

生き残つた男

一六

空き部屋あります

三二

装幀

大倉舜二

雨
に
殺
せ
ば

雨に殺せば

1

「——誰か来たわ……」

由美が、私を揺り動かしてささやいた。——私は、由美の腕を枕に、ゴムまりのようなおつばいに鼻を押しつけて眠っていたのだ。

——女に抱かれて寝たつていいだろう。男が女を抱かなきゃいけないと決まっていたわけのものではないのだから……。強いて言うなれば、これはベッドの長さ^{はば}と巾の問題なんだ。

「——放ツとけよ」

「だつて、あんなに叩^{たた}いてるわ」

「幾時だい？」

「六時よ。夜が明けたばっかり」

「暗いじゃないか」

「雨が降つてゐるのよ。昨夜からずっと。よく降るわねエ」

まだ、ドアを叩いていた。

「——黒さん……。いないのかい、黒さん」

その声に、聞き覚えがあつた——。私の仕事を手伝つてくれている「夕刊東京」のスポーツ記者鍋倉市助の声に違いない。

私は、これでも黒川プロダクションの御大だ。おんたいプロダクションと言つても映画などを作るのではない。週刊誌や地方新聞に、ニュースや読み物記事を送る、つまりトップ屋だ。

私は、うちの記事が、決してお品がいいなんて考えてやしない——。たとえば、鍋倉に手伝わせているスポーツ記事だつて、スキヤンダルめいたニュースばかりなのさ。

——そいつをどう料理するかは、編集者の腕さ……。

私は、あつたかい由美の胸から顔を離し、しめつばいまた股の間から足を抜いた。

「——入れるの？」

「毛布かぶつてろよ……」

私は素ッ裸だつた。ズボンだけ、じかにはいて、寝室と居間の仕切りカーテンを引いた。自慢じやないが、これでも二間続きのアパートだ。三階だぜ……。

窓から、灰色の街が眺められた。どの屋根も、雨に叩かれ、魚のウロコみたいに鈍く光っていた。

「——どつか他へ行けよ……」

私は、ドアをあげずに怒鳴つてやつた。

「ど、どこへ行くんだい？」

「知るもんか！ 飲んだくれて、どつかの塵^{ごみ}ためへキッスして寝てやがつたんだろ。そんな酔っぱらいに、早々から舞い込まれてたまるかい」

「雨が降つてるんだぜ」

「俺のせいじゃねえよ」

「いや……道ッ端で寝るわけがないじゃないか。入れてくれよ。大変なんだ」

「もう、野球選手と映画スターの結婚なんて、食傷^{しよくしやうき}気味だぜ」

「もつと大変なんだ。入れてくれよ」

「俺の都合も考えてみるよ」

鍋倉は、ちよつと黙つたが、すぐ口をドアへくっつけて聞いた――

「わかつたよ。女がいるんだろ？」

「いつでもだ。今朝に限つたことじゃねえ。俺は凄くもてるんだ」

「仕切りのカーテンから向うへは行かないからさ、入れてくれよ」

私はわざと大きく舌打ちをしてから、ドアの鍵をはずした。

鍋倉は、部屋へ飛び込むと、ゴールインしたマラソン選手のように息をはずませた。

レインコートからは、しずくが垂れていた。

「黒さん、なんか着るものないかい？」

「レインコートを脱げよ」

「下まで濡れてるんだ。下着まで……」

「そんなに歩いたんか？」

「いや……、昨夜濡れたらしい」

「らしい!？」

「知らないんだ。三十分前までのことは……」

私は、洋服ダンスのひきだしから、下着を二人分取り出し、鍋倉にも着せ、自分も着た。

「——あつたまつたら帰れよ」

「まだ、何も話していないぜ」

それから、鍋倉は、チラッと仕切りカーテンの方を見た。

「秘密の話かい？」

「僕の一生にかかわる重大事件なんだ」

「興味がねえな。俺は高く売れる特ダネかと思つた」

「聞いてくれよ。知恵^{ちえ}を貸してくれよ。御婦人は誰だい？」

私は、カーテンの方へ怒鳴つた――

「由美、耳にふたをしとけよ」

鍋倉は、ホツとしたように、たばこを啞^くえたが、すぐクシャクシャに折つて、テーブルの上から私のたばこの函をとり上げた。

「――たばこもマツチも湿^{しめ}つてやがる」

私も、鍋倉の指が震えているのに気付いた。

「どこで飲んだんだい？」

「四軒……。いや、五軒かもしれない……。いい気持ちだつたんだよ。雨が降つてね、頼ッペタを、スーッ、スーッと、雨だれが流れたのを覚えてるよ」

「傘は？」

「八時頃は降つていなかったよ」

「飲み歩いてるうちに降り出したつてわけ？」

「そうらしいな……。生酔い本性たがわず……。ッて信じるかい？」

「それが重大な話かい」

一凄く重大なんだ……。僕はね、酔ッばらうと、何もわからなくなつちやう。——本性たがわずな
んて、信じられないんだ」

「それからどうしたんだ。雨の中を歩いて？」

「誰かに呼びとめられたんだよ。——鍋さん……。鍋さん……。ぐしよ濡れじやないか……。とかな
んてね。そして、車へ引ッぱり込まれた。いい車だったよ、シボレーの新車なんだ」

「車だけ、やけにはつきりしてゐるなア」

「してゐるさ。三十分前まで、その中にいたんだものな」

「車の中で眠つたのかい？」

「そうらしいんだ。いや、そうに違いない」

それから鍋倉は、まばたきもせず、私を見詰めた。

「信じてくれるかい、こんな話？」

「旦那は、自分のあだ名を知つてゐるかい？」

「——ペロ鍋……」

「だから信じるね。あゝ、眼が醒めたら凄いいシボレーの中だったなんてね、ペロ鍋の場合、有り得
ることさ」

「しかもだよ……」

鍋倉は、ゴクリと生唾なまつばを呑みこんでから、言葉を続けた。

「――僕の横に、若い女がいたんだ。信じてくれるかい？　彼女は、息をしていなかったんだ」

2

その日の夕刊が、現場の模様を詳しく報道していた。

場所は、新橋有楽町のほぼまん中。もとナイト・クラブ「スリーX」エックスの前庭である。――この建物はかなり古いものだつた。戦争中は、或る軍需会社の本社……。戦後は、進駐軍専用の宿舎に改装され、次に将校集会所となり、日本側へ返還後にナイト・クラブになつた。

が……、銀行だの、商社会社のビルだの、放送関係の建物だのに取りこまれ、その上、すぐ横を国電が夜明け前から真夜中過ぎまで走っているこの場所は、ナイト・クラブには向かなかつたらしい。

二三年前にクラブは閉鎖へいさされ、その後はずっと空き家だつた。――権利金は高いし、維持費がかかる関係から、借りてがなかなかつかないのだろう。

建物は明治調の赤レンガで、広い前庭を囲む鉄柵は、近衛騎兵の槍を立て並べたような古めかしいものである。

東京のどまん中……。ビルの谷間に、こんな廃屋はいおくがあるなんて、ちよいとした怪談だろう。

その前庭に、豪華なシボレーの新車が乗り捨てられ、女が殺されていたのだ。

女は二十二三歳……。派手な化粧をしていたが、化粧をしていなくても、相当な美人だった。——死因は……、明らかに扼殺^{やくさつ}。女の息の根を止めた指の跡が、いくつか、血の気を失ったノドのまわりに残っていた……と、新聞は伝えていた。

死亡推定時間は、前夜の十一時頃……と、これも新聞にのっている。

これが他の場所だつたら、もつと早く発見されていたことだろう。新しい道交法の施行以来、道路駐車の出来なくなつた自家用車族が、ちよいちよいこの廃屋の前庭を無断使用で車を置いておく。それに、どしや降りだつた。

だから、昼過ぎまで、誰もこの車に気がつかなかつた。

十一時半頃から雨が止み、付近のビルから、昼休みのオフィス・ガール達が、野うさぎのように表へ飛び出し、幾人かが、廃屋の庭歩きと洒落^{しやれ}込んだ。

そして、車の中をのぞき、パトロール・カーが素ッ飛んで来なければならぬ程派手な悲鳴をあげたのだ。

——鍋倉は、幸運だつた……。

その頃彼は、私と由美がお楽しみをしたあとのベッドで、頭を冷やしていたのだ。

私は、靖国神社裏のややこしい道を辿^{たど}っていた。——太平洋スポーツ・クラブの事務所をさがし

ていたのである。

鍋倉は、昨夜の十時以後の記憶を、殆んど失つていた。何を聞いても、らしいと、かもしれないだ。

私は、夕方からの鍋倉の足跡を追つてみようと考えた。

鍋倉の話では、五時から、太平洋スポーツ・クラブで、来日中のブラジルの拳闘選手のカニックス・木戸にインタビューしている。

「——クラブを出たのは七時近くさ……。フェニックスの練習も見たから、遅くなつたんだ。それから、新宿のパリー座の楽屋へ行つた」

そう言つて、鍋倉もニヤツと笑つた。

「ストリップ劇場だよ。だけど、裸のストリッパーをただで見ようなんてわけじゃないからな、仕事さ。ハニー・毛リツで娘が、プロレスの兄^あンちゃんに熱をあげてるツてんでね、話を聞きに行つたんだ」

そこを出たのが八時ちよいと前……。

「飲み始めたのは、それからだよ。足場がよかつたんで、新宿裏のおにぎり酒場“ドテ八”へ行つた。あー、ママが黒さん、近頃おみかぎりね……ツて言つてたぜ……」

私がメモをしたのが三軒だ。——“ドテ八”から、スタンド・バーの“ネネ”、サービス・バー